2017年度ＧＴセミナー
職域別見守る保育セミナー2017
2018.1.15 ～ 1.16 前編

第４７号　２０１８年１月２２日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カグヤ　奥山卓矢

職域別見守る保育セミナー

職域別見守る保育セミナー

2018年１月15日～16日に職域別見守る保育セミナー2017が東京都千代田区のＴＫＰガーデンシティ竹橋にて開催しました。

保育士を対象にするセミナーの開催は多い中で、調理師・栄養士、看護師、事務職や子育て支援員など、園に勤める専門職の先生方を対象にしたセミナーです。

全国から70名程の先生方が集まり、各園の実践を語り合ったり、情報交換を２日間に渡り行いました。

１日目　2018年１月15日（月）

10：00～　新宿せいが子ども園見学
13：45～　基調講演「見守る保育の考え方」
15：45～　休憩
16：00～　実践発表
17：30～　意見交換会

２日目　2018年１月16日（火）

9：00～　グループディスカッション
12：00～　昼食
13：00～　グループ発表
14：30～　まとめ
15：30　　終了

基調講演『見守る保育の考え方』

保育環境研究所ギビングツリー代表　藤森平司氏（新宿せいが子ども園　園長）

―はじめに―

皆さん、今日は見学お疲れ様でした。ありがとうございました。何回かご覧になっている方もどうだったかと思いますが、ちょうど昨日、―昨日センター試験が行われました。皆さんが受けられたか分からないが、私の頃はセンター試験はなかった。実はこのセンター試験は 2020 年に廃止される。今それに対して改革が行われているが、勉強を振り返る度に、学習は何かと思うことがある。私は幸い必死に勉強したわけではないが、勉強して覚えることは何かと思う。センター試験で無効になる人がいる人が、今年は何人くらいいるのかということに興味ある。去年は 13 人無効になった。何故かというと、スマホでカンニングした学生が無効になり、毎年情けなく思う。何が情けないかというと、スマホを使った学生を使った学生ではなく、カンニングできる問題を作った人が情けない。授業でもスマホを使うのが増えているのに、使えばあっという間に解けるのに、そんな問題を出しているのかと思うと情けない。若い人は検索がすごい。うちの職員は若い人が多く有難いが、西村君が去年ロボットを開発している人が園に話に来た。彼は私に九大を出ていると言っていて、クラブは空手出ています。と話相手の情報を調べてくれる。千葉に行った時に、グーグルマップで地図が見れるがどこか分からないときに、交番があったのでおまわりさんに聞いたら、スマホを出して検索をはじめ、お巡りさんもこういう時代なのだという時に、使わないで解きなさいと今もしているのだと思う。そこを含めて改革するのだが、そこで出題する答えも変わってきている。一番よく分かるのがどんな問題を出して、どんな暗記をしたかが分かる。時代によって変わってきている。講演を始めた頃、鎌倉幕府の成立は何年か？と聞くと、ほとんどの人が 1192 年と答えるが、今や年寄り。皆さんにお子さんがいて、そんな時代ではないと言われている。全員がああいう覚え方をしている。今更違うと言われる。そういうように、鎌倉幕府が成立した年が変わるはずないのに何で変わるか。例えばよく例に出すが、私くらいの年齢になると、働く女性は家で家事をしていればいいと言うような人がいるが、これはその人の責任だけではない。私たちの頃、年を聞くとわかるが教科の中で技術家庭があった。技術と家庭の授業になると、男子は技術室へ行き、女性は家庭科室へ行き料理や家事をする。男性は木工や園芸をして、男女で分かれて授業をする。そう育っていると料理は女がするもんだ。電機が壊れたら男が直してくれと思ってしまう。そんな言われ何処にもない。昔のことになるが、保育園に男性が入りはじめの頃、職員会議で業務分担をすると男性は大道具係りという。それはおかしいでしょ。大道具係りは男性がおかしい、そうですね一緒にやるべきですね、それもおかしい。重いものを運ぶことが多いので力がある人がなればいい。

―教育の刷り込み―

私の娘がとても誇らしく思うことが一つある。私の娘が小学校６年生の時にお兄ちゃんの影響もあって、応援団長をやりたいと言いに行った。そうしたら、先生からは応援団長は男がやるもので応援をしたかったら、チアガールをしなさいと言われた。どうしてもやりたいとお兄ちゃんの体操着を着ていった。その小学校は歴代で初めて女性の校長で、女性だって応援団長をするべきだと言った。だから、赤組、白組男女一人ずつ応援団長にしようと言ったら、娘は猛反対をした。それは平等ではない。応援団長は大きな声で応援する人だから、立候補した人が大声に向いている人がするべきで、

男子だからやるとか、男女平等だから一人ずつするのはおかしい、大きい声を出せたのが男子ならそれならそれでいいと言った。娘は学校始めて以来初の応援団長をし、その後もないらしい。そう思ったときに当然男女は違う。大道具は男子ではなく、重いものを持つ人としている。私たちは教育をされていく中で刷り込みが多い。男とは、女とはの刷り込みが大きい。私たちの仕事で影響する刷り込みは子どもとは、赤ちゃんとは、というのが大きい。皆さんが習ってきた子どもとか赤ちゃんとか、育児とはということも大きく変わって来た。これは子どもが変わってきたわけではなく、例えばアレルギーについても一時期は気にもしていなかったが、早いうちに除去をしておくと改善されると除去食がされてきていたが、アレルギー学会では除去しているからアレルギーが増えてきていると言われはじめ、摂取するということになってきている。特に親はそう思うが、今は実はそうではないことも少しずつ変わってきている。これから大きく変わるのは菌や危険防止についても言われている。怪我が急増しているのは、怪我について神経質になってから増えている。だからと言って急に危険にさらしていいわけではない。最近有難いことに赤ちゃんに対する研究が進んできている。しかしなかなか、保育を教える大学の先生は忙しくて、新しいことを勉強する時間がない。危険回避能力で行った時、段差の深さ、奥行きを認知する能力が赤ちゃんからある。ガラスを張って、ここが崖だとここへ行かない。しかし、行ってしまう赤ちゃんと自分から危険を回避する赤ちゃんとあって、どこで分かれるかを調べると、移動距離が多い子ほど危険察知をすると言われている。危ないからと言って止めてしまうほど、危ないところへ行ってしまう研究がされている。危険なところに行かすのはやめましょう、はかえって、その危険を感じさせることを失くしているとわかってきている。私たちは子どもを見ている時に新しい研究を基本にしないと逆効果になってしまう。アレルギーも除去をすればいいと　いうことではなく、その時期に必要なことを摂取させないことになってしまう。現在、舌下治療と言って例えば卵自体を下に入れていくとか、アレルギーの人には少しずつ入れていくとかの治療があり、医学的な治療に変わってきている。最近の紫外線の対策もすごく危険だと言われているのが、一時期皮膚がんになると言われ帽子を被る、日に当てないようにするあまり、骨が骨粗鬆症みたいでクル病が増えてきていると言われている。骨ができるためにはカルシウムを摂取するだけでなく、太陽の日を浴びないといけない。運動しないといけない、重力の中で支えないといけないという中で骨ができてくる。太陽の光は微妙で当たりすぎても当たらなすぎでも骨が出来ない。適度な量浴びないといけない。人間は不思議にできていて、今いるのはホモサピエンスだが、中央アフリカから出て世界中に住み始める。住むとその地域にあった体になっていく。外から見える体の変化が肌の色と言われている。肌の色はどれくらい摂取すればいいかで決まってくる。北欧は光が少ないのでなるべくとるようにするとか、日本は日本の地域にあった肌の色をしている。それがある時期、植民地時代に人の国に占領する時代があった。一番、顕著なのがオーストラリアとかニュージーランドとか、マオリ族がいたが所をヨーロッパの人が植民地にした。そこに白人が住んでしまったら当然皮膚がんになる人が増え、それで紫外線がよくないと防いだ。日本では日本のちょうどいいように出来ている。それなのにオーストラリアの例から帽子を被る、外に出ないとかで問題になっている。気を付けないといけないのが、生活する上で適度に遊ぶくらいがちょうどいいので、日常で遊ぶくらいはちょうどいい。最近分かって来ていて、結論は別にそのままでいいじゃないというくらい。長い歴史で人類はそうしてきた。私の子どもの頃、育児書ができるようになり、有名なのがスポック博士の医学書というのが出た。離乳は２ケ月とか、その頃には赤ちゃんには、はちみつを飲ませた方がいいとか、その頃に出てきた心理学がフロイト。いつまでも母乳を与えていると性的なことになってしまうという心理学が出てきてしまう。その時代に育った人、学んだ人はそう思い込んでしまう。子どもとは、育児とはと思い込んでいることが実は一時期だったことが分かる。

―最新の赤ちゃん研究から分かって来たこと―

最近分かってきているのが赤ちゃんの研究。一番多くの昔と違っているのは、赤ちゃんは私たちが思っている以上に早い時期から何でも出来る。赤ちゃんは未熟で大人がやってあげないといけない存在だったが、赤ちゃんは有能で、自ら成長しようとする存在であるとわかってきている。色や聴力。味覚を生まれながら持っていると言われる研究が多い。昔みたいに大人がやってあげないとというのは覆されている。見守る保育を提案している根拠の最初は赤ちゃん間の変化。昔はやってあげなければ、見守らなければだったのがそうではない。自ら学ぶことが多い。だから大人は見守ってあげることが大事だと提案し、もともとの赤ちゃん観の変わり方です。そういうことが根拠にあるので、新しい考え方を言っているわけではない。一番の大きな赤ちゃん観の変化が、白紙で生まれいろいろ経験させることで、いろいろな力を身に付けていくことが全く否定されている。何もできない、知らない状態で生まれるわけではない。ニューロン・シナプスの密度は生まれて１年位が１番多い時期。それを上手にバランスよく減らしていく。これを刈り込みというが、刈り込んでいくことが成長だとわかってきている。上手に減らしていくことが私たちの仕事であり、下手に刺激する、干渉したりするとバランスよく減らせなくなってしまう。偏って減らしてしまうとわかってきたことでもある。昔は白紙論だったが、繰り返しになるが保育ではないが、昔は生まれたてで、だんだん経験するにしたがって、脳神経が濃くなって、若者でピークになって、だんだん死滅していくということが思われていた。私たちはこの時期に経験させ、脳の神経細胞を増やしていくように思っていた。これが育児であり保育であったが、生まれてから 01 歳がピークで上手に減らしていくこと。直線ではないが減らしていくことが大事である。この頃に分かったのが、赤ちゃんは色々な能力を持っている。どの国の赤ちゃんでもＬとＲの発音の違いを理解できると言われている。次第に日本ではこの区別はいらないけど、ら行の一音が必要になってくる。その代りこの区別ができるとか、有名なのがサルの顔の区別。人間の顔と同じように区別できるが、人間界に生きてい上で、サルの顔の区別はいらないということでだんだんできなくなって、人間の区別がよりできるようになると言われている。ですから上手にということで、昔は赤ちゃんに刺激して言葉かけしていたが、今はそうしてしまうと上手に減らせなくなると言われている。これを二社関係敏感性と言われ、赤ちゃんにはよくないと言われている。発達障害の子たちに関してで、発達障害は増えていかない子、出来ない子だと思われていたが、この時期になるとこれができるはずなのにできないと言われていたが、そうではない。現在の発達障害は上手に減らせず残ってしまう子。バランスよく刈り込みができていない子と言われている。赤ちゃんは手足をバタバタするが、次第に落ち着くがそれを残してしまうと多動性発達障害となったり、残ってしまうところが極端に減ってしまう。発達に偏りのある子と言われている。海外では突出できているから天才と言われ、理系の科学者はほとんど発達障害と言われ、エジソンは有名です。現在生きているとしたらスピルバーグ、日本では長嶋選手もそう。脳科学の澤口さんもＡＤＨＤ。ある部分が残ってしまうということで、普通の人たちはバランスよく減らすのに、関わりすぎるとバランス良く減らせず、発達障害っぽくて 4.5 歳になる時になる子が多くなってきているのでは、乳児期に関わりすぎる、干渉しすぎると言われている。現在は愛着の研究の遠藤先生でさえ、あまり関わり過ぎない方がいい。赤ちゃんが負の状況困った時に、助けてあげる存在がいるというサインを送ることが大事で、赤ちゃんが自ら行動しているんだということ。やってあげてしまうことは、バランスよく削れなくなってしまうことと、いらないと思って削ってしまう。赤ちゃんは自分たちで生きていく能力を持っている。その一つが好き嫌い。生きていくための防衛本能と言われている。赤ちゃんは何が好きで嫌いかを身に付けていると言われている。これを端から見て、かわいそうと思って無理やり食べさせると味覚が壊れて、大人になって食べなくなると言われてきてい

る。最近の赤ちゃん研究が変わってきている。変わってきているのは新しいことになっているのではなくて、昔から知らずにやってきた育児方法に戻って来ている、昔はそれほど気にしていなかった。美味しいものがいっぱいあったわけではない。ちょうど昨日ＮＨＫで人体のシリーズをやっていた。昨日は腸についてやっていて、アレルギーについてやっていた。明日動画を観ようと思っているが、その中に曹洞宗の総持寺で修行しているものがある。その修行僧の中には、アレルギーの人がほとんどいなくなるとやっていた。修行僧には、アレルギーがほとんどいない。何故かというと、腸内細菌ができているということだったが、それは食物繊維を多くとっているから改善させているとやっていた。昔は普通にそういうものを食べていた。肌の色と同じで、その地域にあった出来る食物が、その地域で生活するのに必要な摂取するもの。日本人の特徴と言っていた。外国とは違う。それが必要だし、世界の中で日本が腸内細菌が多いとやっていた。世界中のものが日本でも食べれるようになり、いつの季節にでも食べるようになった。その季節に取れるトマトやキュウリは、夏にとれるもので体を冷やす効果があり、冬にとると冷やし過ぎてしまう。南国のフルーツマンゴーなどは体を冷やすためにあるのに、日本で取るとバランスを崩してしまうことが分かって来ているので、季節や地域で採れたものを取りましょう、というのはそういう意味がある。牛乳アレルギーが多いのは分解する菌を体内で持っていないことが多い。牛乳を飲むと下してしまうこともある。そういうことを考えたときに、時代によって変化すると私たちは悩む。

―昔からの育児―

そうしろとっていたのに、ダメと言われ悩むが、そこで私は研究の結果よりも、人類は昔からどうしていたかを考えるようにしている。そうすると次第にそういうことが研究されてくるとわかって来た。見守る保育を提案し、10 か条を出しているのは、もともと人間とはどういう生き物で、他の霊長類とどう違うのか。どういう風に子どもというのは発達し、生きていくためにどんな力が必要かの根本を学び、それにあった保育をしないと思い込みやイメージだけで、無理やり食べさせているだけでは、その子の栄養になったり、身体を丈夫にすることにならず、逆効果になってしまうかもしれない。よく例に出すのが、一つは菌について。色々な菌がいっぱいある。例えば、帯状疱疹とかの菌もその辺りにある。それを免疫力が低くなると掛かってしまう。もともと自分の中にある菌が防いでいる。体には一杯菌を持っていることが大事。その菌を赤ちゃんが体内に取り入れるようにできている。一番は赤ちゃんが生まれ産道を通る時に、お母さんについている菌を身に付けてくる。ですから逆に帝王切開で生まれると菌がついていない。昔は生まれてから６カ月は、お母さんの免疫力をつけているので病気にならないと言われていた。その次に母乳を飲むことで、腸内細菌（乳酸菌）を取り入れていると言われている。同時に乳首の周りの菌を取り入れていると言われている。それを一時期、人工乳の方が栄養があると言われたり、私の子どもが生まれたときは、乳首の周りの菌を取りましょうと言われていたが、今は危険と言われ体内に取り入れるのにいいと言われている。次第に赤ちゃんは菌を身に付けていく。次第にハイハイをすると強い菌に出会っていく。その前にずり這いがあって、色々なものをなめて菌を取り入れている。そしてハイハイをしていった先の菌をなめる。それを今は、触るものを全部消毒してしまうのでそういうことは無理。こういうことが神経質なのは日本人の特徴。2，３年前にインドに行ったが、インドでは日本人だけは特殊扱いで、ホテルでは水は飲んではいけない、歯ブラシもペットボトルで洗ってください。生野菜は食べないでくださいと言われた。外でたまたまマックに入って、コーラを頼んだら氷が入っていた。氷も飲まないようにと言われ、店の人もすぐ取り換えてくれた。インドでは、ガンジス川でみそぎをして体を洗うが、知り合いがインドに行って、それをしたいとやったら１か月入院した。子どものためと言いながら、そういうことをしてしまっている。怪我もそう。移動距離が多いほど危険を感知するという研究がありながら

も、全部止めてしまう。よく私の園に見学しに来た人が、階段は危なくないですかという。私もハラハラする。当然子どももそう思う。だから気を付けます。園の中で怪我をすることが多いのが階段よりも、何もない平らなところで怪我をする。そう思ったときに、どういう環境がいいのかを考えるが、一番の根本は自ら防ぐ能力を持っていると信じること。これを大人がなくしてしまっている。持っているということは、自ら学ぼうとすることなので、能力を身に付ける時に、与えて覚えさせるのと、自分から学ぶのとでは極端に違う。学ぼうとすることはその子にとって、一生の智慧になるが、やらせてさせることは、言われてやることになるので機能としては拡大していかない。そのために、自発的にやることが大事で、自分からやる環境をつくらないといけない。もともと指針の中にあるが、自発的な行動を中心にしなさい、食べさせることは栄養にならない、自分から食べたいと思う環境をつくること。昔のようにやってあげるのは保育では、保育士が保育することが中心だったが、自分からやろうとする環境を用意しようとしたら、保健も調理も用務も関係ある。同じ理解をしていかないといけない。直接子どもに関わるのが大事なのではなく、環境を用意すること。給食の与え方も、そう。例えば繰り返しになるが、ドイツで感じたことがある。給食の場面を見た。ドイツの環境・食事のあり方を撮って来た時がある。

―ミュンヘンの保育事例―

ドイツは 0～6 歳まで異年齢でいるがこんな姿を見た。ここに赤ちゃんがいるがこっちはトイレ。ドイツでは 0 歳の赤ちゃんは自分でハイハイしていく。次の写真を観たらお集りをトイレでやっていた。ここなんかは、おしゃぶりがトイレに転がっていた。乳児保育のトイレだが大人用の便器に台を取り付けている。家庭にはこれしかないから園で練習をしている。菌もそうだが、園を特別な場所として捉えないで家庭の中で自立をしていくためにしていく。それからトイレだが、おむつ交換台が基本的には階段があって寝転がっている。先生が乗っけていくことはしない。これは赤ちゃんの自立よりも先生の腰を痛めないため。異年齢なので赤ちゃんのおむつを替える時に赤ちゃんが変えているのを他の子が見ている。外国の園庭は芝生で綺麗だったが地部分は石畳にしている。ドイツの道はこういうところが多いから、平らにしていると躓いてしまうので、もともと持っている力を発揮できるようにこうしている。昔は芝生だったが砂利だったりしている。向こうの園長は子どもたちが歩くであろう地面を再現していると言っていた。砂利道を日本で見るとこの石を投げませんか？と聞かれるが、これを投げていたら道にあるものをみんな投げている。運動のところは木のチップがひいてある。それから石の周りにハーブが植えてある。ヨーロッパではハーブは雑草。香りがあるものを植えることで五感を感じさせようと植わっている。この段差がちょうど子どもが躓くであろう物を作っている。ドイツは水を大事にして流れた先が、泥になったりしている。泥の中にいることで菌の免疫力をつけているので、夏は泥遊びをすることが多い。プールに入っているのを見たことはなく、水遊びや泥遊び。園庭は子どもが走り廻る場所と捉えていない。外気に触れる場所、寝っ転がる子も保障する。園庭には蜂を呼ぼうということで、ドイツではいろいろなところに公園がある。公園があるので蜂もいる。蜂の巣を作ることで蜂との過ごし方を学んでいる。共生するためにはどうしたらいいかを学ばせている。本屋で、園庭には蜂の巣を作りましょうという本が売っていた。

―選択する意味―

給食の場面だが、２種類出してどっちを飲むかを子どもに選ばせている。大きなピッチャーで来るが先生は自分で注げるものに入れ変える。うつ病研究をしている中である学生の論文の中にある老人施設の実践が書かれていた。１階の老人に

は目玉焼きとスクランブルエッグ、翌朝どちらを食べたいか前日までに選んでおいてください。映画会をするので前の日に観たいかどうかを決めてください。植木鉢を好きなのを選んで育ててください。２階の老人には目玉焼きとスクランブルエッグを毎日交互に作ります。映画会を月水金が廊下側の人、火木土は窓側の人。植木鉢は持っていくので育ててくださいとしたら、ほとんど２階の人は亡くなっていた。１階の人は自分の意思で選んでいることが分かった。そこでマウスを使って実験をした。マウスに５割でなくなる肉腫を与えた。１つ目のグループには電気ショック与え、２つ目のグループはボタンを押したら電気ショックが止まるもの。３つ目のグループは幸せに暮らしていた。まず、３つ目のグループは５割でなくなる肉腫を与えていたので５割が死んだ。１つ目のグループはストレスを与えると７割が死んだ。２つ目のグループは電気ショックを与えるが、自分で止められるものは２割しか死ななかった。研究の結果、自分で選択することは病気でさえ克服する。がんになった人が何とかなるという人が回復させたことがあって、こういう力、ポジティブに物事を考えることで免疫力が高くなるのではないか、子どもが選択させることが大事なのではないかということで飲み物から子どもに選択させる。子どもたちにも２種類出している。飲み物は子どもは自分で注ぐ。ピッチャーを持てない子には先生は子どもの手を持って先生が入れる。食器は保育室内に置いていて、そこから持っていっている。陶器の大きさも持ちやすいのから色々あって、自分で選んで持っていく。ドイツでは自分で持てる大きさの量を食べるのがちょうどいいと考えている。みんな同じ大きさが平等なのではなく、自分が持てる大きさくらいが最適ということで自分で選ばせている。この日はパスタとトマトソース、チーズ。園長は「最初の一月はお皿よりも机の上が多かったが、だんだんお皿の上が多くなってきた。次第に自分で入れられるようにすることが保育です」と言っていた。スプーンで入れるためには平らに動かさないといけない。これは箸を使う時にも、大事になる。自分でよそえない赤ちゃんは先生が手を持ってあげる。トマトソースを食べる？チーズ食べる？とお皿を押し出してあげる。頂きますをしたが、ほとんどトマトソースをかけていない子が多い。その時に質問をした。「これで、栄養が足りるのか？」と聞いたら、園長から「自分の意思を大事にしています」と言われた。そこには先ほどの老人施設の研究がある。食事は子どもに病気に勝ってほしいから食べさせるが、嫌なものを無理やり食べさせても健康にはならないということが分かってきているので、ドイツではそっちを優先している。皆で食べることで自分から食べるようになる。食べなさいと言って食べさせても病気になる可能性がある。ドイツは研究を元にしている。研究では自分の防衛本能と言われていて、ビタミンCが足りなければこの食品からとるとか、バランスよく摂ることが大事。肉ばっかりというのはよくない、バランスよく食べる。好き嫌いのことがよく問題になるが、こういったことが研究されている。味覚は胎内の中から育っていると言われている。胎内ではおへそからだが、生まれてから羊水を飲んで排泄していると言われている。お母さんがミカンが好きだと羊水から子どもも栄養を摂っているため、お母さんの趣向が受け継ぐのではないかと言われている。アレルギーになるのはお母さんが好きではないものを子どもに必要だろうと無理して摂っているからではないかと言われている。赤ちゃんは胎内から自己本能として、毒があるものは飲み込んではいけないので、苦いと思ったら飲み込まない。他の動物でもそう。象は何でも食べるが苦ウリだけは食べない、苦いものは危険を察知して食べない。食べた後に危ないと思うのが腐っているもの。酸っぱい物は急いでむせて吐き出すのはその名残だと言われている。リスクが低いのは甘いものなので羊水に甘いものをつけるとうっとりした顔をする。次第に酢の物やお酒が好きになるのは安全なんだ、毒がなくて美味しいんだと分かってくるかというと、信用している人が美味しそうに食べている姿を見ると味覚が変わってくると言われている。私の園では好き嫌いがある子には、その子の目の前で美味しそうに食べる姿を見せている。ただ病気だから食べさせたい場合はピストルを突き付けたら食べると思うが、出来るだけ食べなさいと食べさせても口に入れているだけで栄養にならない。安心でないと

思うとのどを締め付けてしまう。以前、内臓の手術をしてあるとき、控室で麻酔をしてうがいをして胃カメラを飲もうと看護師さんを呼び、突然部屋に入った瞬間にげーげーした。部屋に入った瞬間にのどが胃カメラを入れたと判断した。その時に小学校に勤めている時に、これ食べないの？とその子に言ったらげーげーした。わざとらしくではなく、食べないの？と言ったら食べたと判断したのだと思った。大体注意する人は好き嫌いが多い人が言うことが多い。嫌いなものがない人はそんなに神経質にならない。でも美味しそうに食べるとか、わいわい食べるとか子ども集団の役割がある。好き嫌いだけでなく赤ちゃんは自分が欲するものを食べると言われている、それが選択する意味。見学のポイントの

―新宿せいが子ども園 見学の 10 のポイント―

1．子どもが自発的、意欲的に関われるような環境の構成と、そこにおける子どもの主体的な活動を大切にすること

まず 1 つ目。意欲的に関われるように、子どもが発達するためには意欲的にすることが将来の学習能力に繋がる。環境を通して行うことなので、そういう環境を構成する。主体的活動、自分で主体的にすることで部屋を生活と遊び、自発的に遊ぶことが学習であると書かれている。幼稚園教育要領には主体的な生活をすること、自発的に遊ぶこと、そういう環境をゾーンとして自ら関われる場所を作ることで非認知能力をつけようということが書かれている。

2．子ども一人一人の発達について理解し、一人一人の特性に応じ、発達の課題に配慮して保育すること

一人ひとりに応じるけど 1 対 1 で保育をすることはできないので、あるグルーピングをしていくが子どもがそれを選択して保育する。それで一人ひとりに応じることで食べることにしてもそう。ある日の午前中のおやつの場面を見たいと思う。去年韓国で講演した時に一番反響があった動画。子どもに赤ちゃんだがから無理だろうと、やらせようとする保育が多い中でそれを観ていきたいと思う。

・・・動画再生 中略 ・・・

先生たちは質問形式が多い。給食やお集りになっても遊んでいる子がいます。ここで声を掛けるかどうかとよく質問をもらうことがある。ここは声を掛けます。ただしどうする？と決定は本人がします。割と質問形式でします。これは気が付かなかったが、海外の研究で質の高い保育に「温かく応答的であること」と書かれ、もう一つが質問すると書かれている。質問する関わりは色々な知識を聞くことだと思ったら、そうではなくて決定を本人がする。あなたはどう思う？どっちにする？というのは選択と同時に、大学の入試試験はほとんどが、あなたはどう思うか？ということ、考えを述べるものに変わってくる。自分ではこうするとか。究極の選択もある。外で遊ぶのと中で遊ぶ？と聞くと、どっちかと子どもは答える。いつも中という子にはどうすればいいかと聞かれる。そういう場合は、こっちの公園に行く？あっちの公園にいく？と聞けばいい。選択肢は私たちが用意するので選んでほしくないものは聞かなければいい。質問は本人の選択意思で行動させるという意味がある。この時に当然早く片づけないと調理は大変だろうとか、早く返してくれたらいいのにと思っても、子どもがこういう学びをしているのだと分かると焦らなくて済む。じゃあこういう時にはこういう段取り取りましょうとか、うちでは用務員さんが保育として関わっている。どの職種だからではなくて同じ方向を見ていく。

3．子ども一人一人の発達について理解し、一人一人の特性に応じ、発達の課題に配慮して保育すること

子どもは多様な大人。子ども同士の体験から社会を学んでいくこと。社会をつくっていく一員として色々な大人と接することが必要。色々な役割があって色々な人がいること、外国ではシティズンシップと言って大事にしている。

4. 保育者は、子どもが自発的、主体的、多様な人との関係の中で活動するために、いつでも駆け込める愛着という存在でいること

保育者は子どもが自発的、主体的、多様な人との関係の中で活動するために、いつでも駆け込める愛着という存在でいること。これは最近、親の存在ではないかと思っている。一昨日ある園の保護者講演をした時に、見守る保育をするときに親はどうすればいいかと聞かれたので、子どもに何かあった時、助ける用意があるとしてくださいと伝えた。子どもだけでしていた時、何か負の状態になった時の安心基地としての存在、どの年齢でも必要なので、保育者は信頼のある身近な大人として存在すべきだと思っている。

5. 子ども同士の中で刺激しあうということから、様々な年齢とのかかわり

子ども同士の中で刺激し合うことから、さまざまな年齢との関わりを保障する。

6. 子どもは、職員のチームによって、多様な社会とのかかわりを学習すること

職員はチームによって多様な社会との関わりを学習すること。0 歳の部屋を信頼できる大人がチームを組んで子どもたちを支えていく。

7. 子どもを、男女、しょうがい、年齢による刷り込みを持たないこと

子どもを男女障害があるかないかではなく、男とは女とはとせず、どの場所でどのケアが必要かを見ていかないといけない。

8. 子どもが自立していくこと、自己の意思を表明しようとすることを保育者は妨げてはならない

子どもが自立しようとしていくこと、自己の意思を表明しようとすることを保育者は妨げてはならない。これは子どもの権利条約に謳われていること。

9. 保育者は、子どもに奉仕したり、面倒をみたりする人ではなく、一人の人格を持った人として子どもと共に生活すること

保育者は子どもに奉仕したり、世話をする人ではなく、一人の人格を持った人として子どもと共に生活すること。
そうすることで子どもの人権も守る。

10. 子どもの権利条約（私案　乳幼児教育基本法）に則った保育を展開しなければならない

子どもの権利条約に則った保育を展開しなければならない。これに沿って児童憲章や色々な法律が作られているので、もう一度見ていきましょうというのが私たちが提案する保育の 10 か条。

同じ方向、想いで子どもの研究が効果があると逆にしてしまうとできなくなってしまうことがあるので、もう一度振り返り様々な観点から構築していってほしい。この後お互いの実践を話し合ったり、自園の形を見ていって欲しい。

本稿は、2018 年 1 月 15 日に行われた職域別見守る保育セミナー2017 の講演内容をまとめたものです。

（文責/奥山卓矢）